



【書評】塚越康男著『俺のひとり言』第三巻自刊
A5判 一九九ページ

著者の塚越康男氏は昭和二十一年（一九四六）茨城県生まれの七十五歳。屋根瓦・鍍金工事業の㈱エンデ・パーツカコシ取締役会長。日本を美しくする会前関東ブロック長であり、茨城掃除に学ぶ会の代表世話人でもある。

酒井董美 ただよし

筆者は本書を見た瞬間、有名出版社の新刊かと思つたほど、りっぱな装幀だったが、どこを見ても出版社名や価格の記されていない自費出版だった。優れた編集者がいなければ、このようなりっぱな書籍は作れないはずと、いろいろ出版してきた筆者は、まず出来映えの見事さに兜を脱いだ。

以下に目次から項目を紹介しておく。「自分に厳しく、雄々しく生きる」「短歌会と私の作品」「俺のひとり言」「俺の語録55題」二年間別解説と年間語録・平成十四年（令和三年）「偉人のことば」「あとがき」。

著者の自由な裁量で編集されているのが楽しい。カットや写真も自在に取り入れつつ、著者夫人は書家なのか、随所に夫人の書が活用されているのも微笑ましい。タイトルに続く項目や、「俺の語録55題」の五十六ページは活字を使わず、夫人の美しい書体でまとめられている。例えばこの項の最初のページは「世間とは／どんな事を／考えても 言つても／事業に成功しなければ／無だよ／人は認めない／「たわ言」に終わることになっているが、一つの語録が「ページ」になり、これが五十六語録あつて、五十六ページを占めているのである。「この手法は最後の「偉人のことば」でも七点七ページにわたって用いられているが、このように大胆で贅沢な編集が出来たのも、自費出版なればこそである。「あとがき」の一部を引用しておく。

……塚越家に入り会社を創業して十年目くらいから、企業経営の勉強を始めた。私が四十代の頃はいい会社にしようと思つたら勉強したと思う。本当の「社長」と言われるような会社にしたかったからだ。五十代になった頃には仏教や哲学書などを読むことが多くなり、私なりに社会に対する様々な考えを深める機会にもなつてきた。……198ページ

著者の人生哲学を凝縮しているこの本は、常に前向きで、人生を肯定しつつ歩む気概にあふれており、読む者に「人はいかのあるべきか」を教えてくれているのである。（元島根大学法文学部教授）